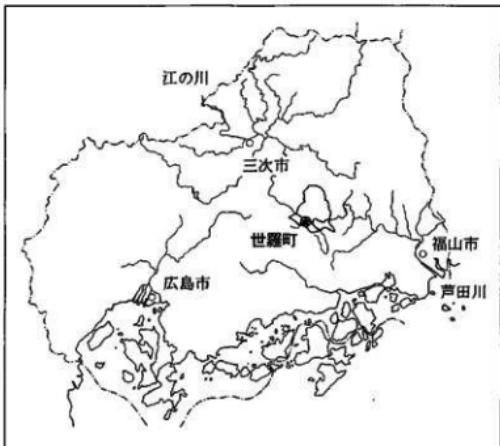


亀ノ尾第1号古墳発掘調査報告書

2000

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

亀ノ尾第1号古墳発掘調査報告書



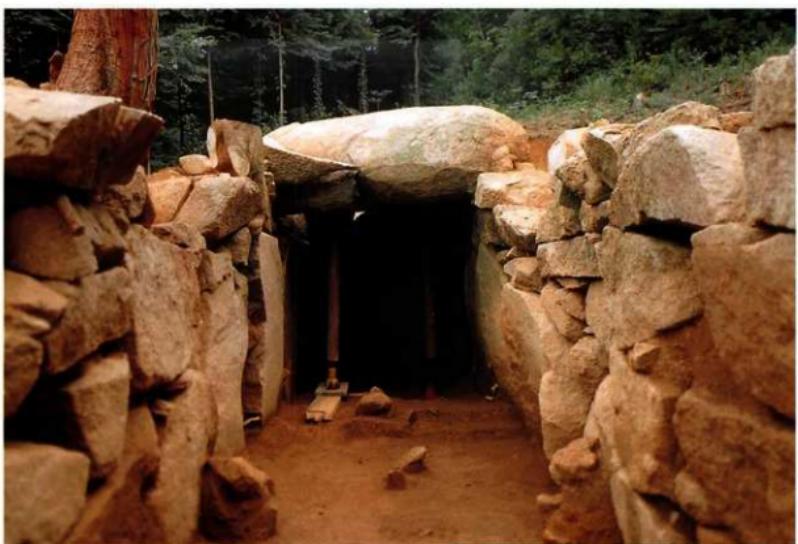
世羅町位置図 (◎は古墳を示す)

2000

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター



a 古墳全景



b 石室内全景

例　　言

- 1 本書は1999（平成11）年度に調査を実施した広島中央区域農用地総合整備事業に係る亀ノ尾第1号古墳（世羅郡世羅町大字賀茂所在）の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は農用地整備公団西部支社（現・緑資源公団西部支社）との委託契約により財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は辻 満久、木村 勇が担当した。
- 4 出土遺物の整理・復元・実測、図面の整理、写真撮影などは辻が中心となって行った。
- 5 本書の執筆・編集は辻が行った。
- 6 土器の断面は須恵器を黒塗り、ほかは白ヌキとした。
- 7 遺物は挿図・図版とも同じ番号を使用した。
- 8 本書に使用した方位は第1図が真北で、ほかは磁北である。
- 9 第1図は建設省国土地理院発行の1：25,000地形図（備後小国、本郷、下徳良、甲山）を使用した。

本文目次

Iはじめに.....	(1)
II位置と環境.....	(2)
III調査の概要.....	(5)
IV遺構と遺物.....	(6)
Vまとめ.....	(23)

卷頭図版

- a 古墳全景
- b 石室内全景

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図(1:25,000)	(3)
第2図 周辺地形図(1:1,000)	(5)
第3図 地形測量図・墳丘測量図(1:200)	(7)
第4図 墳丘断面図(1:80)	(8)
第5図 石室実測図(1)(1:60)	(9)
第6図 石室実測図(2)(1:60)	(10)
第7図 石室内遺物出土状況実測図(1:40)	(11)
第8図 前庭部遺物出土状況実測図(1:40)	(12)
第9図 出土遺物実測図(1)(1:3)	(14)
第10図 出土遺物実測図(2)(1:4)	(17)
第11図 出土遺物実測図(3)(1:2)	(19)
第12図 出土遺物実測図(4)(2:3)	(20)
第13図 SK1実測図(1:10)	(21)
第14図 出土遺物実測図(5)(1:3)	(22)

図版目次

- | | | | |
|------|--|------|--|
| 図版 1 | a 遠景（南から）
b 全景（調査前、南から）
c 同上（調査前、東から） | 図版 5 | a 天井石（東から）
b 石室掘方土層（北側、東から）
c 石室掘方土層（西側、南から）
d 石室掘方土層（東側、南から）
e 調査風景
f 調査風景 |
| 図版 2 | a 全景（調査後、南から）
b 同上（調査後、東から）
c 東側周溝土層（南から）
d 北側周溝土層（東から） | 図版 6 | a 石室全景（南から）
b 石室基底石（南から）
c 石室掘方（南から） |
| 図版 3 | a 墳丘盛土（南から）
b 石室全景（南から）
c 石室（南から） | 図版 7 | S K 1 遺物出土状況及び全景 |
| 図版 4 | a 石室奥壁（南から）
b 同 左（南から）
c 石室北西隅（南から）
d 石室北東隅（南から）
e 石室床面（南から）
f 同 左（北から） | 図版 8 | 出土遺物（1） |
| | | 図版 9 | 出土遺物（2） |
| | | 図版10 | 出土遺物（3） |

I はじめに

亀ノ尾第1号古墳の発掘調査は、広島中央区域農用地総合整備事業に係るものである。本事業は食糧需要の多様化、生産地間の競争の激化など農業を取り巻く環境が厳しくなり、生産性の高い農用地の形成や生産者の組織化など農業全体の再編が進められるなか、需要動向に即した農産物の安定供給と高生産性農業の育成及び流通の安定化、さらには広島・京阪神・九州方面などへの迅速な流通を図ろうとするものである。

農用地整備公団西部支社広島中央建設事業所（以下「中央建設事業所」という。）は、1997（平成9）年11月、当該事業予定地内（農業用道路第Ⅲ工区分）の文化財等の有無及び取扱いについて、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）と協議した。県教委はこれを受けて世羅町教育委員会（以下「町教委」という。）と現地踏査を行った。1998年6月、町教委は県教委の了承を受け、中央建設事業所に対して、事業地内に亀ノ尾第1号古墳が存在する旨回答した。本古墳の取扱いについて、県教委と町教委は中央建設事業所と協議を重ねたが、計画変更等による現状保存は困難との結論に達し、県教委は中央建設事業所あてに事前の発掘調査が必要である旨通知した。

中央建設事業所は1998年10月15日付けで県教委あてに発掘調査を依頼し、県教委は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）が発掘調査を行うことが適当であると通知した。これを受けて中央建設事業所とセンターは、1999年7月1日付けで委託契約を結び、7月5日から9月22日までの約2か月半発掘調査を実施した。なお、8月29日には遺跡見学会を町教委と共に実施したところ、125名の参加があった。また、同事業（第Ⅱ工区分）に係っては1998年度に風呂之元古墳の発掘調査が実施されている。

本報告書は、以上のような経緯のもとに実施した発掘調査の成果をまとめたものである。今後の埋蔵文化財の資料として、また、この地域の歴史の一端を知る手がかりとなれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、農用地整備公団西部支社広島中央建設事業所、世羅町教育委員会及び地元の方々に、多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

II 位置と環境

亀ノ尾第1号古墳は世羅郡世羅町大字賀茂字亀ノ尾944-1,-2,-3に所在する。

世羅町は広島県の東部、備後地域のはば中央部に位置している。世羅郡（甲山町・世羅町・世羅西町）一帯は標高400～600mの隆起準平原地形をしており、「世羅台地」と呼ばれている。この台地の中を構造線の方向=南北方向に走る浸食谷が発達している。この浸食谷を流れる河川は西大田、大田、甲山、三川、小国などの小盆地で合流し、大半は芦田川に合流し瀬戸内海へ注ぐが、一部は江の川に合流し三次盆地を経由して日本海へ注ぐ。このように町内は両水系の分水嶺となっている台地に浸食した谷により、河川の多くは樹枝状に入り組んでおり、これらの河川の合流地を中心に沖積地が発達し、小盆地（小平野）を形成している。

町内の遺跡は小河川単位に分布しており、大まかには芦田川とその支流、及び江の川の支流沿いにまとまりがみられる。本古墳は芦田川の上流域に位置しており、南に延びる丘陵の南西側斜面に立地する。

世羅町では古墳を中心に多くの遺跡があるが、ここでは発掘調査された遺跡を中心に、町内の歴史的環境を概観していきたい。

旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡は町内では未確認であるが、隣接する御調郡久井町の筋原垣内遺跡⁽¹⁾でナイフ形石器やフレイクが出土している。縄文時代の遺跡は、後期の土器と石器を出土している神崎⁽²⁾おおいけ大池遺跡⁽³⁾が存在する。

弥生時代

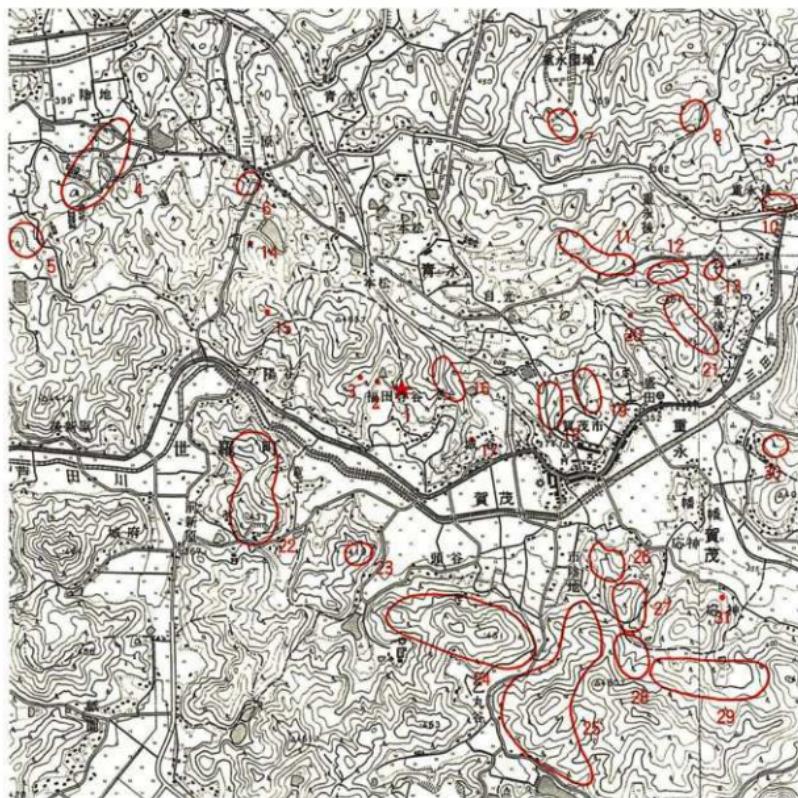
遺跡の数は少しづつ増加する。前期のものには箕口⁽⁴⁾2号遺跡、同3号遺跡等があり住居跡や土器・石器類が確認されている。中期になると土居丸遺跡⁽⁵⁾、大田遺跡、世羅高校3号遺跡などがあり、後期では藤箱遺跡、音丸遺跡、田龍遺跡などで住居跡が確認されている。また、近重山1号遺跡は墳墓と考えられている。

古墳時代

世羅町では現在までに500基余りの古墳が確認されている⁽⁶⁾。これらの古墳は本古墳の存在する賀茂地区（芦田川水系）、安田・徳市地区（江の川水系馬洗川流域）、津口地区（同美波羅川流域）に集中して分布する。

前期の古墳としては竪穴式石室をもつ寺上山第5号古墳、永安寺第8号古墳、矢が迫第1号古墳などが確認されている。さらに、大谷山古墳群、陽谷第1号古墳、円城古墳群、竜王山第1号古墳のように箱形石棺を主体部にもつものや帆立貝形の墳形をもつ向原第5号古墳や前方後円墳の因幡第5号古墳などが存在する。また、青山大追遺跡では古墳時代初頭の箱形石棺墓群を検出している。これら前期の古墳は丘陵の頂部や尾根の見晴らしの良い場所にあるものが多いようである。

古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳は谷水田の開発に伴い沖積地の縁辺部に広がっている。



第1図 周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1 龜ノ尾第1号古墳 | 2 龜ノ尾第2号古墳 | 3 龜ノ尾第3号古墳 | 4 向原古墳群 | 5 瀬戸原古墳群 |
| 6 三原古墳群 | 7 太平西山古墳群 | 8 夜打追古墳群 | 9 天王古墳群 | 10 夜打追東古墳群 |
| 11 猪飼古墳群 | 12 風呂谷古墳群 | 13 照光寺裏古墳群 | 14 陽谷第1号古墳 | 15 陽谷第2号古墳 |
| 16 福田寺古墳群 | 17 城谷山古墳 | 18 因幡古墳群 | 19 建石古墳群 | 20 盛田古墳 |
| 21 神岡古墳群 | 22 龍王山古墳群 | 23 天神古墳群 | 24 寺上山古墳群 | 25 大明神古墳群 |
| 26 桜ヶ池古墳群 | 27 大谷山古墳群 | 28 宮迫谷古墳群 | 29 倍が平古墳群 | 30 円城古墳群 |
| 31 京免南山古墳 | | | | |

康徳寺古墳は県内でも有数の規模の横穴式石室をもち、被葬者は隣接する康徳寺廃寺跡に関連する人物であった可能性が指摘されている。また、神田第2号古墳の横穴式石室は石扉をもち、7世紀中頃の所産とされる。一方、近成山第1号古墳は石室内に凝灰岩製の石棺の存在が確認されており、7世紀後半に築造時期が求められている。

本古墳の西側約300mにある亀ノ尾第2号古墳は直径15m、高さ5mの円墳で、長さ8m以上、幅2.4mの横穴式石室を内部主体としており、石室内から装飾付須恵器が出土したと伝えられている。

このほか、発掘調査が実施された古墳としては本古墳の北西約3kmの湯船第5・6号古墳がある。いずれも6世紀後半を中心とした横穴式石室を埋葬施設としている。八反田古墳や風呂之元古墳はいずれも無袖の横穴式石室を埋葬施設としており、6世紀末から7世紀前半の時期に比定されている。

集落跡としては土居丸遺跡で竪穴住居跡・掘立柱建物跡などの遺構が確認されている。また、製鉄に関連する遺跡（カナクロ谷製鉄遺跡・湯船遺跡など）や須恵器窯跡（自光窯跡・青水窯跡など）がある。このほか、祭祀に関わる遺跡としては土製模造品を出土した字山遺跡や子持勾玉が出土した字根山開拓地遺跡などがある。

古代

法起寺式の伽藍配置をもつ康徳寺廃寺跡やここで使われた瓦を焼いたと想定される三郎丸窯跡などがある。そのほかにも円面鏡が出土し官衙的な遺跡の存在が想定された田龍遺跡、墨書き土器が出土した今東遺跡、奈良・平安時代頃の住居跡を確認した城府遺跡などがある。

参考文献

- 是光吉基「備後大田庄の可耕地について」『立正史学』第51号 立正史学会 1982年
註
- (1) 久井町教育委員会『久井町文化財調査報告書』1995年
 - (2) 世羅町教育委員会『土居丸遺跡』I 1994年
世羅町教育委員会『土居丸遺跡II』『土居丸遺跡II 青山大追遺跡』 1996年
 - (3) 河瀬正利「藤箱遺跡」『日本考古学年報』21・22・23 日本考古学協会 1981年
 - (4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『田龍遺跡』 1997年
 - (5) 世羅町教育委員会『世羅町の古墳』 1990年
 - (6) 世羅町教育委員会『青山大追遺跡』『土居丸遺跡II 青山大追遺跡』 1996年
 - (7) 世羅町教育委員会『康徳寺古墳』 1997年
 - (8) 是光吉基「石扉を有す一古墳について」『広島県文化財ニュース』第60号 広島県文化財協会 1974年
 - (9) 世羅町教育委員会『近成山第一号古墳調査概報』 1991年
 - (10) 世羅町教育委員会『湯船第6号古墳』 1995年
 - (11) 広島県教育委員会、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『八反田古墳』 1981年
 - (12) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『風呂之元古墳』 1999年
 - (13) 藤野次史・土佐雅彦「カナクロ谷製鉄遺跡」「中国地方製鉄遺跡の研究」広島大学考古学研究室編 溪水社 1993年
 - (14) 是光吉基「広島県世羅町出土の祭祀遺物」『考古学ジャーナル』No5 ニューサイエンス社 1967年
 - (15) 渡田一夫・是光吉基「広島県世羅郡東神崎出土の子持勾玉」「考古学ジャーナル」No34 ニュー・サイエンス社 1969年
 - (16) 世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺跡－発掘調査報告書－』 1995年
 - (17) (4) に同じ
 - (18) 世羅町教育委員会『今東遺跡』 1996年
 - (19) 世羅町教育委員会『城府遺跡』 1995年

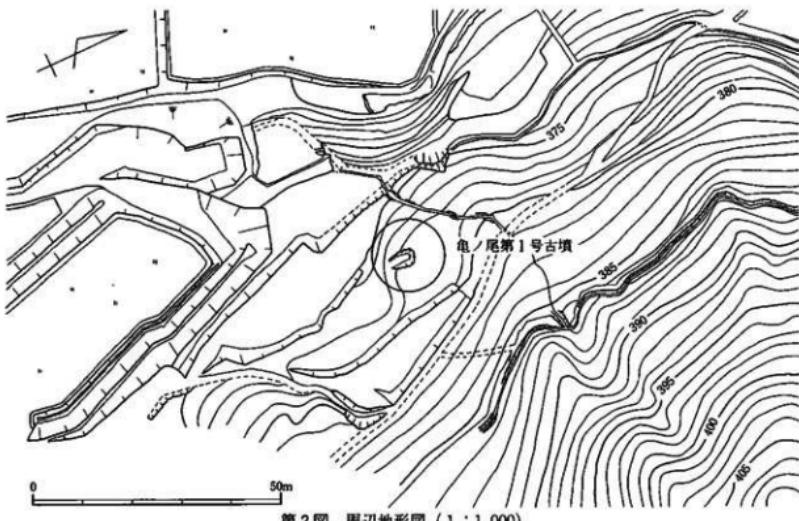
III 調査の概要

亀ノ尾第1号古墳は、芦田川上流により形成された沖積地を望む北から南に延びる丘陵の南西斜面の裾部に立地している。谷を挟んだ西側の尾根には亀ノ尾第2号古墳・同第3号古墳が存在するが、立地的には単独墳に近い様相を呈している。

古墳の周辺の現状は杉の植林をした山林で、南側は茶畠となっていた。山林の一部は平坦に開墾されており、この作業に伴って、本古墳も当初は墳丘や周溝の部分的な破壊が予想された。また、石室には盜掘坑が確認でき、石室内部は約1mの土砂が堆積していた。

調査は、既に開口していた石室の主軸線を通るように土層観察用畦を墳丘に十字に設定して行った。その後盛り土を除去し、石室を解体し、観察を行った。なお、諸般の事情で西側の周溝の一部が完掘できなかった。

直径約15mの円墳で、墳丘の背後を中心に幅の広い周溝が巡っている。埋葬施設は南に向かって開口する長さ約8mの無袖の横穴式石室であった。石室内は盜掘・攪乱を受けており、遺物の遺存状況は良好とは言い難い。石室の床面や前面から須恵器（杯身・杯蓋・壺蓋・高杯・匙・壺・壺）、土師器（高杯）、鉄製品（刀・馬具）、銅製品（耳環）が出土した。また、古墳の北側では周溝埋土を掘り込んだ中世の土壙1基を検出し、多数の土師質土器（皿）、古錢が出土した。



第2図 周辺地形図 (1 : 1,000)

IV 遺構と遺物

立地と現状

古墳は、前面の水田からの比高が約10mの南西向き斜面（標高約376m）に築かれている。南西側は茶畠として利用され、東側は植林等により東から西へ緩やかに傾斜する斜面となっている。古墳の現状は杉を中心として植林された山林である。

調査前の観察では、石室前面部を中心に畠や植林時の開墾等による墳丘の部分的な破壊が予想された。石室は既に開口しており、内部に盗掘や擾乱坑が存在することから遺存状況はあまり良好ではないと考えられた。また、天井石は奥の2石を残して前側は取除かれていた。

墳丘

墳丘の構築は先ず北から南に緩やかに下る丘陵斜面の高所（山側）を中心とした周溝の掘削と、削平による墳丘基底面の造成が行われる。

周溝は地形の傾斜に沿って削りだしており、標高376.5mの等高線付近から自然地形に移行しており、全周するものではない。周溝を含めた古墳の規模は南北約16.5m、東西約15.5mである。周溝の幅は約2.7m、深さ約1m、横断面形はおおむね逆台形である。周溝底面の最高所は墳丘北側で、0.8mの落差で石室前面側に緩やかに下っている。

周溝に囲まれた墳丘基底面はほぼ平坦に整地しているが、北から南に緩やかに傾斜している。また墳丘基底面の西側には旧地表と思われる黒色土が存在する。

盛土はこの墳丘基底面上に行われており、次にこの墳丘盛土の工程についてやや詳細にみていくことにする。本古墳の墳丘盛土作業は大きく3段階の工程を踏んでいるようである。第1工程は石室掘方の裏込め作業で、第2工程は石室天井石の被覆と部分的な墳形の調整作業である。第3工程は最終的な墳丘盛土である。

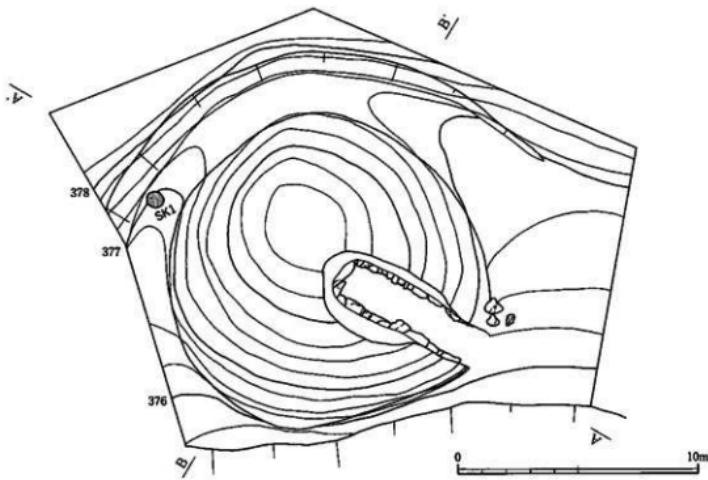
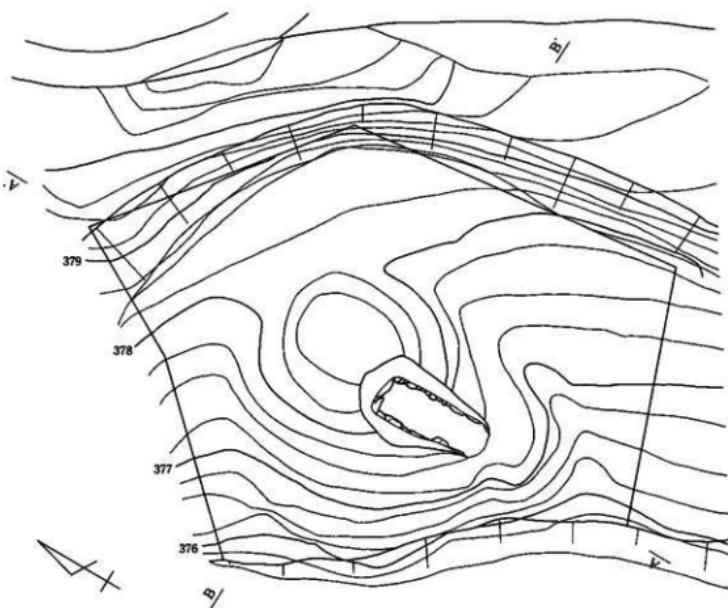
第1工程の石室掘方の裏込め作業は、黄褐色土と黒褐色土を厚さ10~20cmずつ交互に葺き締めるもので、側石の基底石から4~5段目の石材付近まで行なっている。この作業が終了したのちは、側壁の構築に合わせて大まかな墳形を整えつつ側壁上端まで盛土を行う。

第2工程の盛土作業は第1工程のそれに比べると葺き締めも弱く、また盛土も比較的厚い。この工程の盛土作業は天井石上面の被覆が主たる目的で、この作業と合わせて天井石周辺の若干の墳形を整える作業をしている。

第3工程の盛土作業は第2工程で石室の被覆が終了したのを受けて、最終的に厚く盛土して墳形を整える作業である。石室の背後は特に厚く盛られ墳丘の高さを強調している。

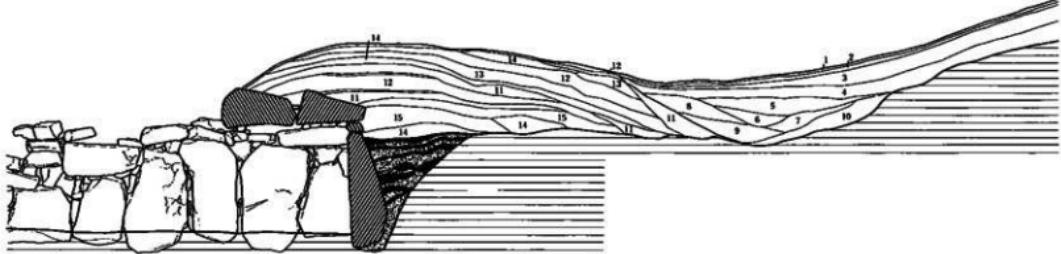
内部主体

無袖の横穴式石室である。主軸方位はN 1° 30' Wで、ほぼ真南に開口している。石室の現存長は約8m、幅は奥壁側で約1.5m、奥壁から2mで1.7m、4mで1.8m、6mで1.7m、開口部で1.5mである。石室の平面形は東壁がほぼ直線的であるのに対して、西壁は中央部がやや膨らん



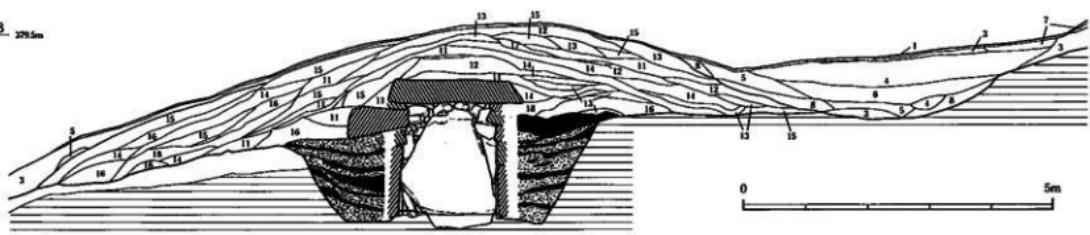
第3図 地形測量図（上）・墳丘測量図（下）（1：200）

A
279.5m



A'

B
279.5m



B'

0 5m

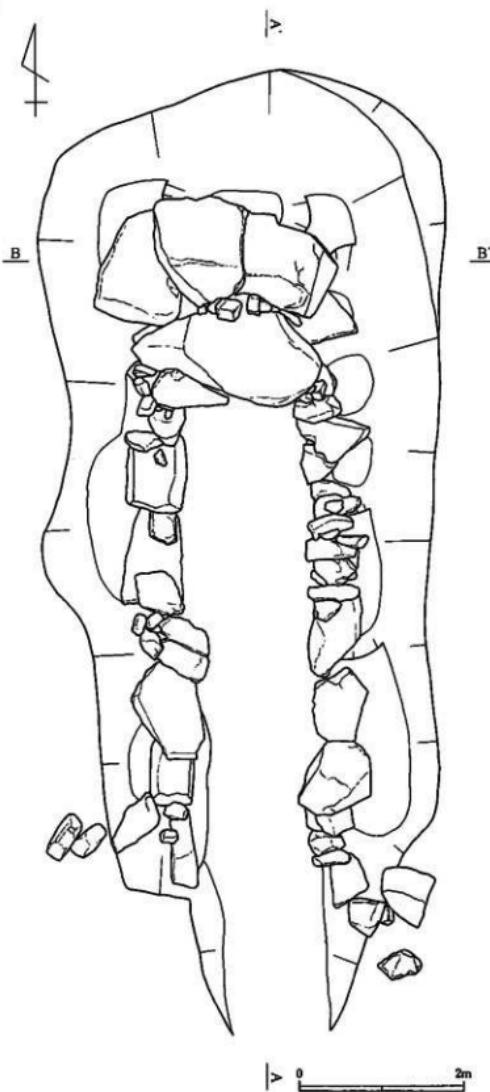
- | | | | |
|-----------|-----------|------------|------------|
| 1 黄土 | 6 暗黄褐色粘质土 | 11 暗黄褐色粘质土 | 16 黑褐色粘质土 |
| 2 淡黄灰色砂质土 | 7 暗褐色粘质土 | 12 明黄褐色粘质土 | 17 明黄褐色砂质土 |
| 3 明黄褐色砂质土 | 8 暗黄褐色粘质土 | 13 淡黄褐色粘质土 | 18 浅黑褐色粘质土 |
| 4 淡黄褐色砂质土 | 9 黄褐色粘质土 | 14 暗褐色粘质土 | ■ 黄褐色粘质土 |
| 5 黄褐色粘质土 | 10 黑褐色粘质土 | 15 黄褐色粘质土 | ■ 黑褐色粘质土 |

第4図 墳丘断面図 (1:80)

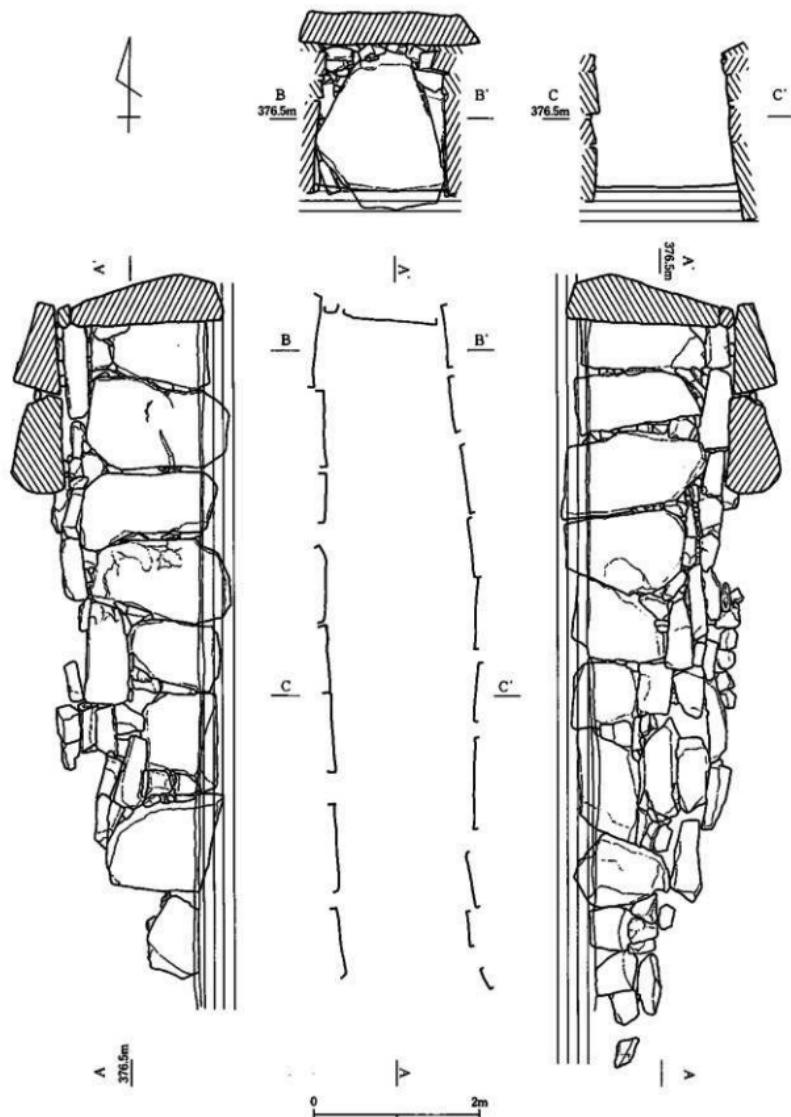
であり、全体としてはやや胴張り気味である。東西両側壁は奥壁から4番目の基底石までを奥壁と同じように縦長に使用しており、この部分で玄室と羨道の区別をしていたものと考えられる。

奥壁は板状の石材1枚を鏡石として使用し、上方の東西両側壁との間隙に小礫を詰めて塞いでいる。特に側壁と接する部分はやや持ち送り気味にしている。

側壁の長さは、東壁が奥壁から8.3m、西壁は8.2mではほぼ同一である。東壁は基底石が10枚用いられており、基底石の隙間に小礫を咬ませている。基底石の高さには段差がみられ、奥壁から5枚目までは開口部に向けて緩やかに傾斜するものは同じ高さだが、6枚目と7枚目で30cmほど低くなり8枚目でまた5枚目と同じくらいの高さになる。また、5枚目までと8枚目の基底石と6～7枚目の基底石は前者が石材を縦長に使用しているのに対して、後者は広口面ないしは小口面を横長に使用しておりここでも明らかな相違が指摘できる。9枚目から10枚目（最先端）の基底石は奥壁から8枚目までの基底石と比べて小ぶりの角礫ないし亜角礫を使っている。以上のことから、東壁では奥壁から5枚目までと



第5図 石室実測図(1)(1:60)

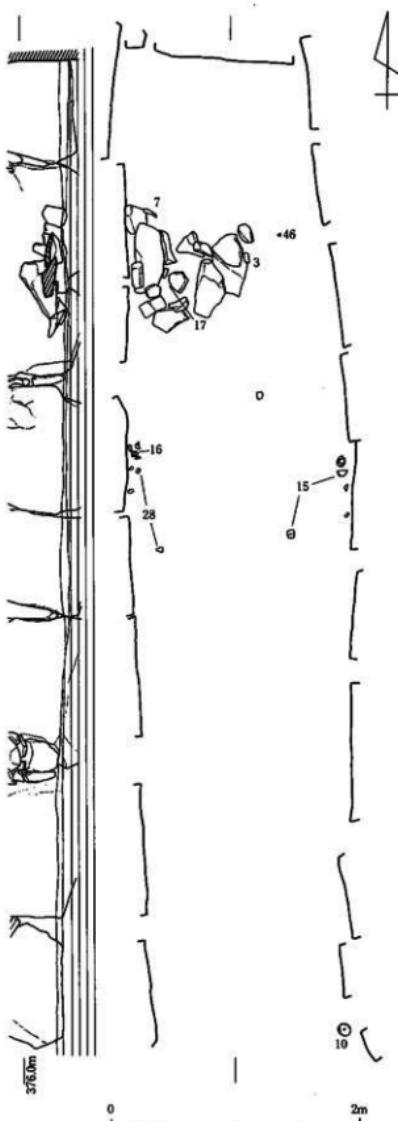


第6図 石室実測図(2) (1:60)

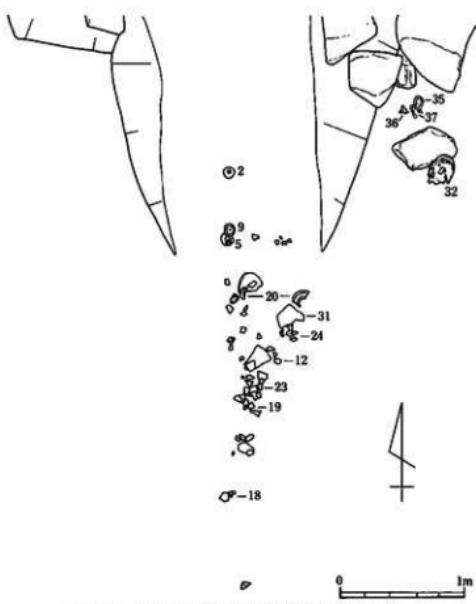
8枚目、6～7枚目、9～10枚目で基底石の使用方法に顕著な差が指摘できる。なお、基底石上には1～4段ほど大小の角礫を横積みもしくは広口積みしている。石材の大きさにはばらつきがあるものの比較的目地は通っている。また、天井部付近はやや持ち送り気味に狭くなっている。

一方、西壁では基底石を8枚使用しており、基底石の間にはやはり小礫を咬ませている。基底石の高さも段差がみられ、奥壁から4枚目までは多少のばらつきはあるもののほぼ高さで、石材を縦長に使用している。5枚目と6枚目の基底石は50～60cmほど低くなっている。7枚目で4枚目と同じ高さになる。また、4枚目までと7枚目の基底石と5～6枚目の基底石は、前者が板状の石材を縦長に使用しているのに対して、後者は広口面ないしは小口面を横長に使用しておりここでも明らかな相違が指摘できる。8枚目の基底石は7枚目から50cmほど低くなっている。以上のことから、西壁では奥壁からの4枚目までと7枚目、5～6枚目、8枚目で基底石の使用方法に明らかな違いがある。なお、基底石の上には1～4段ほど大小の角礫を用いて横積みもしくは広口積みしている。石材の大きさにはばらつきがあり、東壁に比べると目地は整っていない。側壁の天井部付近の持ち送りもみられない。

天井石は2枚残存し、天井石を架構した部分の石室の長さは現状で1.5mとなるが、調査前の状況から天井石の抜き取り等が予想できたので本来の天井石架構部の長さはさらに長いと考えられる。前述した東西両側壁の状況から推定すると、東側壁の8枚目および西側壁の7枚目の基底石付近で側壁が低くなるこ



第7図 石室内遺物出土状況実測図 (1 : 40)



第8図 前庭部遺物出土状況実測図（1:40）

する。遺物は石室床面から須恵器・土師器・耳環が出土し、石室の前面（前庭部）の平坦部からは須恵器・馬具・耳環が出土している。

石室掘方

掘方は墳丘基底面のほぼ中央を断面形が逆台形になるように掘り込んでいる。深さは石室奥壁部で2mであるが、整地面の傾斜に沿って次第に浅くなり、奥壁から約6mの天井石前端付近で0.5mとなる。平面形は隅丸長方形で、長さ11.6m、幅は奥壁部で4.8m、石室入口付近で3.2mである。

石室の基底石は掘方の壁面から0.6~1m内側に配置され、接地面を一段浅く掘り込んで石材の安定を図っている。また、掘方の中軸線からやや西側にずれて配されている。このことや石室の東西両壁の傾斜の具合、西側壁が東側壁に比べて直線的な点などから、本石室は西壁を基準に構築されたと考えられる。

とやこの部分までは側壁の高さがほぼ同じであることから、本来この付近まで天井石が架構されていた可能性が高い。よって、これらの状況から天井石の架構部分の本来の長さ約7mであったと思われる。天井石は奥壁から開口部にかけて若干下傾するよう構築されていたとみられる。なお、天井石間には小角砾を充填して、盛土が石室内部に流入するのを防いでいる。

さて、本古墳では基底石の用い方や石材の組み方などの違いから、石室を玄室、羨道部、封鎖部、石室外に区別できそうである。

石室床面はほぼ平坦で、敷石等の施設はない。石室開口部の前面には1.3m×4mの平坦面が存在

出土遺物（第9～12図、図版8・9）

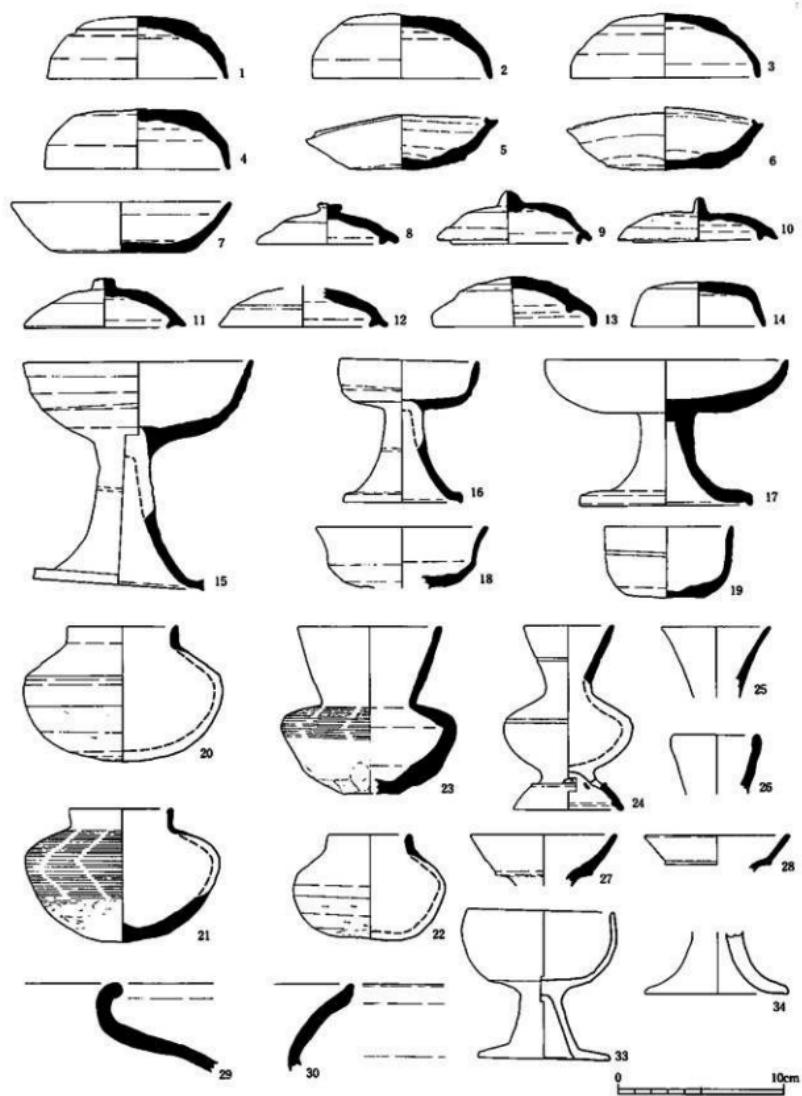
出土遺物には須恵器（1～32）、土師器（33・34）、鉄製品（35～45）、耳環（46・47）がある。その大半が石室床面、前庭部および石室内堆積土から出土している。2・4・7・8・10・11・15～18・21・23・25・26・28・31・46が石室床面から、5・9・12・19・20・24・30・32～36・47が前庭部から、13・14・22・27・37～45が石室内堆積土から、1が南東墳裾から、6が南西側墳丘から、29が南西墳裾から出土している。

須恵器（第9～10図、図版8・9）杯蓋、杯身、壺蓋、高杯、碗、壺、広口壺、低脚付小型壺、壺、甌、甌、横瓶がある。

1～4は杯蓋である。1は復元口径10.8cm、器高3.7cmである。天井部はやや丸みを帯びており、体部は緩やかに円弧を描いて口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整は天井部外面中央部がヘラギリ、以下は回転ナデによる。天井部内面中央部に定方向の仕上げナデがある。色調は青灰色である。2は復元口径10.8cm、器高3.9cmである。天井部はやや丸みを帯びており、体部は緩やかに円弧を描いて口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整は天井部外面がヘラギリ、以下は回転ナデによる。色調は淡青灰色である。3は口径11.4cm、器高3.9cmである。天井部はやや丸みを帯びており、体部は緩やかに円弧を描いて口縁部に至る。口縁部は短く垂下し、端部を丸くおさめる。調整は天井部外面中央部がヘラギリ、以下は回転ナデによる。天井部内面中央部に定方向の仕上げナデがある。色調は青灰色を呈する。4は口径11.0cm、器高3.6cmである。天井部は平坦で体部との境に稜をもつ。体部は外側に直線的に延びて、1/3のところで内側に屈曲し口縁端部に至る。口縁部は垂下し、端部を丸くおさめる。調整は天井部外面中央部がヘラギリ、以下は回転ナデによる。色調は淡青灰色である。

5～7は杯身である。5は口径10.4cm、受部径11.8cm、器高3.3cmである。底部は概ね平坦で、体部は円弧を描いて受部に至る。受部は端部をやや尖り気味におさめる。この受部から内側に短く延びる立ち上がり部はその端部を尖り気味におさめる。調整は底部外面中央部がヘラギリ、体部以上は回転ナデである。器形の歪みが著しい。色調は淡青灰色である。6は口径10.9cm、受部径11.9cm、器高3.8cmである。底部は概ね平坦で、体部は円弧を描いて受部に至る。受部は端部をやや尖り気味におさめる。この受部から内側に短く延びる立ち上がり部はその端部をやや尖り気味におさめる。調整は底部外面中央部がヘラギリ、体部以上は回転ナデである。器形の歪みが著しい。色調は淡青灰色である。7は受部をもたない杯身で、復元口径13.3cm、器高3.0cmである。底部は平坦で、体部は外側に直線的に延びて口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整は底部外面中央部がヘラギリ、体部以上は回転ナデである。底部内面中央部に定方向の仕上げナデがある。色調は淡青灰色である。

8～14は壺蓋である。つまみやかえりが付くもの（8～12）、かえりのみ付くもの（13）、つまみもかえりも付かないもの（14）がある。8は口径8.3cm、器高3.2cm、受部径6.4cmである。天井部外面中央に径1.4cm、高さ0.5cmの中央が若干窪むボタン状のつまみが付く。天井部から受部は緩やかに傾斜し、受部の端部をやや角張り気味におさめる。かえりはやや内方に短く延び、端部



第9図 出土遺物実測図(1) (1:3)

を少し角張り気味におさめる。調整は天井部外面中央部がヘラギリ後横方向のナデ、以下は回転ナデによる。色調は青灰色を呈する。9は口径9.2cm、受部径7.8cm、器高3.2cmである。天井部外面中央に径1.5cm、高さ0.8cmの乳頭状のつまみが付く。比較的平坦な天井部からゆるやかに屈曲して「ハ」字形に開きながら受部に至る。受部の端部は若干角張気味におさめる。かえりは受部から内側に弧を描きながら短く延びる。端部は丸くおさめる。調整は天井部外面がヘラギリ後横ナデ、以下は回転ナデによる。天井部内面中央に定方向の仕上げナデがある。色調は淡青灰色である。10は口径9.7cm、受部径7.6cm、器高2.9cmである。天井部外面中央に径0.9cm、高さ1.0cmの乳頭状のつまみが付く。天井部から緩やかに弧を描きながら受部に至る。受部の端部は若干角張り気味におさめる。かえりは短く垂下し、端部を角張り気味におさめる。調整は天井部外面がヘラギリ後横ナデ、以下は回転ナデによる。天井部内面中央に定方向の仕上げナデがある。色調は青灰色である。11は復元口径9.7cm、復元受部径7.6cm、器高2.9cmである。天井部外面中央部に径1.5cm、高さ0.7cmのボタン状のつまみが付く。天井部から緩やかに弧を描きながら受部に至る。受部の端部はやや尖り気味に丸くおさめる。調整は天井部外面がヘラケズリ後横ナデ、以下は回転ナデによる。天井部内面中央に定方向の仕上げナデがある。色調は淡赤褐色である。12は復元口径10.1cm、復元受部径8.1cmである。天井部に欠失がみられるのでつまみの有無については明確でないが、あった可能性が高い。天井部から緩やかに弧を描きながら受部に至る。受部付近で短く屈曲しその端部はやや尖り気味に丸くおさめる。かえりは内側に短く延び、その端部を若干尖り気味に丸くおさめる。調整は天井部外面がヘラケズリ後横ナデ、以下は回転ナデによる。色調は淡青灰色である。13はつまみをもたないもので、口径9.6cm、受部径6.4cm、器高3.0cmである。器形の歪みが著しい。丸みの強い天井部から緩やかに弧を描きながら受部に至る。受部付近で屈曲して、短く垂下した受部の端部を丸くおさめる。受部からかなり離れた位置に短いかえりが付く。かえりの端部は丸くおさめる。調整は天井部外面がヘラギリ、以下は回転ナデによる。色調は淡青灰色である。14は口径8.1cm、器高2.6cmである。平坦な天井部から強く屈曲してやや開き気味に垂下する口縁部の端部を丸くおさめている。調整は天井部がヘラギリ、以下は回転ナデによる。天井部内面中央に定方向の仕上げナデがある。色調は淡青灰色である。

15~18は無蓋高杯である。15は口径13.9cm、器高13.7cm、脚部高8.9cm、基部径3.5cm、脚底径10.4cmである。脚柱部は杯部中央と若干ずれた位置に接合されている。脚部は基部から垂直気味の柱部を経て、ラッパ状に外方に広がり脚端部に至る。脚端部は若干上方に拡張されやや窪む端面をなす。端部は尖り気味におさめる。柱部外面に沈線が一条巡る。杯部は体部から緩やかな弧を描いて口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整は杯底部外面がヘラケズリの後回転ナデ、そのほかは回転ナデによる。杯底部内面中央部に定方向の仕上げナデがある。色調は淡青灰色である。16は口径8.3cm、器高8.5cm、脚部高5.5cm、基部径2.4cm、脚底径7.0cmである。脚部はラッパ状に外方に広がり脚端部に至る。脚端部は若干上方に拡張され端面をなす。端部は角張り気味におさめる。柱部外面に沈線が一条巡る。杯部は平坦な底部から強く屈曲し、やや開き気味に

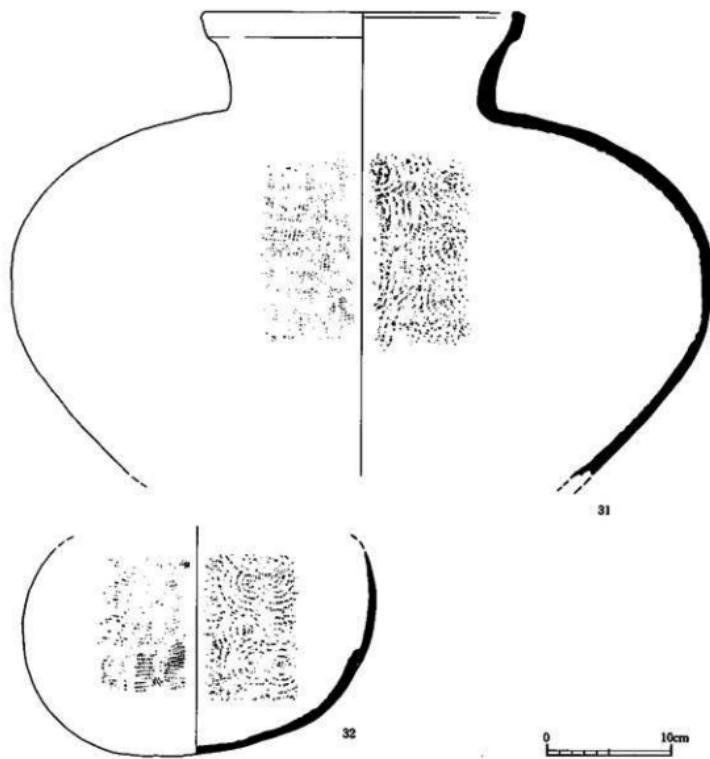
まっすぐ上方に延びて口縁部に至る。口縁端部はやや角張り気味に丸くおさめる。調整は杯底部外面がヘラケズリの後回転ナデ、そのほかは回転ナデによる。色調は青灰色である。17は口径14.6cm、器高8.7cm、脚部高5.6cm、基部径3.8cm、脚底径10.3cmである。脚部は垂直気味の柱部を経てラッパ状に外方に広がり脚端部に至る。脚端部は若干下方に拡張され端面をなす。内面脚端部直下に一条の凹線が巡る。杯部は底部から緩く弧を描いて上方に延び口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整は杯底部外面がヘラケズリの後回転ナデ、そのほかは回転ナデによる。色調は淡青灰色である。18は復元口径10.2cmで、脚部を失っている。体部中位に緩やかな稜部をもち、ここからやや外反し口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。調整は杯底部外面がヘラギリ後回転ナデ、ほかは回転ナデによる。色調は淡青灰色である。

19は椀で、口径7.5cm、器高4.2cm、底部径4.7cmである。平坦な底部から緩やかに屈曲して上方にまっすぐ延びて口縁部に至る。口縁端部はやや角張り気味に丸くおさめる。体部ほぼ中央に沈線が一条巡る。調整は底部外面がヘラギリ後回転ナデ、体部は回転ナデによる。色調は淡青灰色である。

20～22は壺である。20は口径6.5cm、器高8.1cm、体部最大径12.1cmである。底部は丸く、体部は肩が張る扁平な球体をなす。口縁部は垂直に短く立ち上がり、端部を丸くおさめる。肩部直下に凹線が一条巡る。調整は外面が底部から体部中位や下方まではヘラケズリ、体部中位から上方は回転ナデによる。色調は暗灰色である。21は復元口径6.2cm、器高8.0cm、復元体部最大径11.9cmである。底部は丸く、体部は肩が張る扁平な球体をなす。口縁部は垂直に短く立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は外面が底部から体部下位1／3までは粗いヘラケズリ、体部1／3から頸部直下まではカキ目を施し、口縁部は回転ナデによる。色調は淡暗灰色である。22は口径4.8cm、器高6.3cm、体部最大径9.2cmである。底部は若干丸みを帯びるがほぼ平坦である。体部は肩の張る扁平な球体をなす。口縁部はやや内傾気味に短く直立し、端部を丸くおさめる。調整は外面が体部中央や下位まではヘラケズリ、体部中央から口縁部は回転ナデによる。色調は淡青灰色である。

23は広口壺で、復元口径8.5cm、器高10.0cm、復元底径3.6cm、復元頸部径5.7cm、体部最大径9.2cmである。底部は平底で、体部は肩が強く張る扁平な球体をなす。口縁部は頸部から外上方に直線的に延び、口縁端部を丸くおさめる。調整は外面が底部から体部下位1／3までは粗いヘラケズリ、体部から肩部までは回転ナデ、肩部から頸部まではカキ目を施し、口縁部は回転ナデによる。色調は淡青灰色である。

24は低脚付小型壺である。口径5.4cm、器高11.0cm、復元頸部径2.9cm、基部径3.2cm、復元脚底径6.4cm、復元体部最大径7.9cmである。脚部は開き気味に延び、脚端部に至る。脚部中位に断面三角形の段状の突帯が廻り、この突帯の直上に台形の透かしを3か所入れる。脚端部は丸くおさめている。脚端部直上の内面に断面台形の小さなかえりが付く。壺部は丸底の扁平な球体状をなす。体部の最大径部のすぐ上方に凹線が一条巡る。口縁部は頸部から外上方に直線的に延び、端部を丸くおさめている。口縁部の中位に凹線が一条巡る。調整は壺部外底面がヘラケズリと思わ



第10図 出土遺物実測図（2）（1：4）

れるが、丁寧な回転ナデにより消されており明らかではない。壺部の底部内面中央に定方向の仕上げナデが、また脚部中央内面には不定方向の仕上げナデが認められる。色調は暗灰色である。

25・26は壺の口縁部である。25は復元口径6.4cmで、ラッパ状に開き、端部を丸くおさめている。調整は回転ナデを施し、色調は淡青白色である。26は復元口径5.0cmで、外上方に直線的に延び、途中で直立し端部に至る。やや肥厚する端部を丸くおさめている。調整は回転ナデを施し、外面には淡緑色の自然釉が付着している。色調は暗灰色である。

27・28は甌の口縁部である。27は復元口径8.6cmで、やや内湾気味に外上方に短く延びる口縁部の端部を若干角張り気味に丸くおさめている。口縁部の中位に段をもつ。調整は回転ナデを施し、色調は淡青灰色である。28は口径8.6cmで、器形は若干歪んでいる。直線的に外上方に短く延びる口縁部の端部を丸くおさめている。口縁部の中位に段をもつ。調整は回転ナデを施し、色調

は淡青灰色である。

29・30は壺の口縁部である。29はやや外反する口縁部の端部が玉縁状に肥厚する。調整は口縁端部付近が横方向のナデで、胴部外面は格子状タタキ目の後部分にハケ目を加え、胴部内面には同心円文タタキ目が施されている。色調は淡青灰色である。30は外方に大きく開く口縁部の端部が端面をなしており、やや角張り気味におさめている。調整は内外面とも横方向のナデを施し、色調は淡青灰色である。

31は壺の口縁部から胴部にかけてで、底部を欠く。復元口径24.0cm、復元頸部径21.6cm、復元胴部最大径56.0cmである。胴部は扁平な球体を呈し、口縁部は頸部で強く屈曲し、開き気味に直立して、口縁部に至る。口縁端部は外側にわずかに肥厚し、角張り気味に丸くおさめる。調整は口縁部が横方向のナデ、頸部以下は外面が格子目状のタタキ目、内面が同心円文のタタキ目で内面の同心円には、車輪文が確認できる。

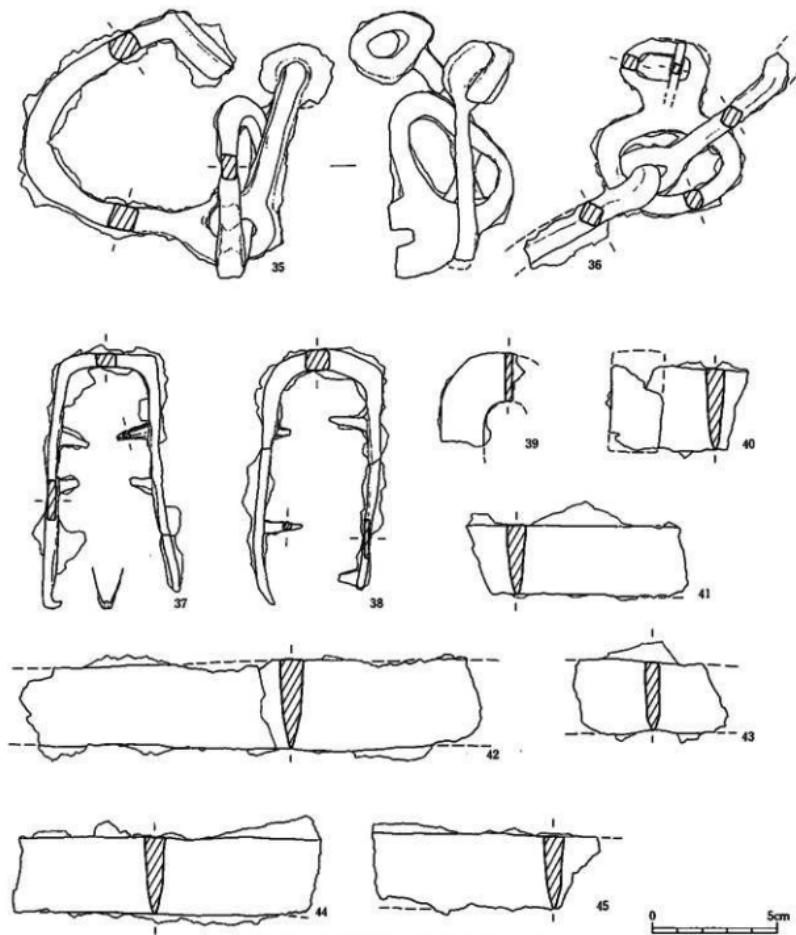
32は横瓶である。片方が膨れた俵形の胴部で長軸側の最大径は28.4cm、短軸側では19.2cmである。口縁部から胴部上半が消失する。焼成が悪く、脆弱である。調整は外面が格子目状のタタキ目の後に部分的に縦方向のカキ目が巡る。内面は同心円文のタタキ目を施してあり、中央部を塞ぐ円盤状の接合痕跡を見いだすことができる。接合部付近では内面にナデの痕が顕著で、擬口縁になる。接合面の調整は内面では余り確認できず、もっぱら外面を平滑にしたものと思われる。

土師器（第9図、図版9）高杯がある。

33は口径8.9cm、器高9.1cm、脚部高4.0cm、基部径3.0cm、脚底径8.0cmである。器表面の剥落が顕著で調整等については不明である。脚部は外側に緩く開いて直線的に延び、脚端部付近で強く屈曲して横方向に延び脚端部に至る。脚端部は丸くおさめる。杯部は平坦な底部から円弧を描きながら延び、やがて直立てて口縁部の端部を丸くおさめる。色調は赤橙色である。34は脚部片で、復元脚底径8.8cmである。大きくラッパ状に開き、脚端部を若干角張り気味におさめる。調整は回転ナデを施し、色調は淡赤橙色を呈する。

鉄製品（第11図、図版9）馬具（轡・鎧金具）、鉄刀がある。

35～38は馬具である。35・36は素環鏡板付轡である。衡の端環に鏡板と引手を同時に掲めるタイプの轡である。35の鏡板は鍛接立聞鏡板で、4.2cm×6.0cmの横長の楕円環に長方形の立聞を付設すると思われる。楕円環の断面は0.6cm×1.0cmの長方形である。引手の長さは14.2cmで、両端には円環がある。引手は強く湾曲し、半円形になっている。引手軸の断面形は1.0cm×1.2cmの長方形である。衡は長さ8.2cmの銜枝が1本あり、断面は径0.8cmの円形である。36の鏡板も鍛接立聞鏡板で、4.3cm×5.8cmの横長の楕円環に2.5cm×3.5cm、厚さ0.6cmの長方形の立聞を付設する。楕円環の断面は0.7cm×0.8cmのほぼ正方形で、立聞の中央部に鏡板とは遊離して1.1cm×2.1cmの長方形の立聞孔が設けられている。この立聞には長さ2.2cm以上、一辺0.4cmの断面が正方形になる棒状の細い刺金が付いている（鉤具造立聞轡）。引手の長さは8.5cm以上で、片端には円環がある。引手軸の円環は消失している。引手軸の断面形は0.6cm×0.8cmの長方形である。衡は長さ6.3cmの銜枝1本が現存しており、断面は0.7cm×0.8cmのほぼ正方形である。以上35と36は形状等か



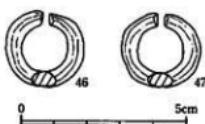
第11図 出土遺物実測図（3）(1 : 2)

ら同一の巻で、鏡板が立聞を含めて8の字形をし、街枝が二本の二連式の巻になると思われる。37・38は鎧金具で、対をなすと思われる。木製壺蓋の鉄製吊り金具で、鎧縄に繋がる吊り手部分と薄い帯状の脚部からなる。37は長さ10.2cm、幅4.5cmの「コ」字形の平面形で、断面が円形の鉄鋲が上方と中位に2か所ずつ、合計4か所に打ち付けられている。鉄鋲の長さは約1.3cmである。脚端部は短く直角に曲がり、先細りして先端が尖って曲り鉤状になっている。片方の脚端部につ

いては欠失しているので不明である。なお、木質は残っていない。38は長さ10.2cm、幅4.7cmの「コ」字形の平面形で、断面が円形の鉄錆が上下2か所ずつ、合計4か所に打ち付けられている。側面の邊部は若干内側に湾曲し、やや先端が細くなり尖る。鉄錆の長さは約1.3cmである。なお、木質の痕跡は残っていない。

39~45は鉄刀である。同一個体と思われるが、鋳化が激しく判然としない。39は鐔である。全形の1/4程度が残っている。厚さ3cmである。40は鐔の部分である。留金具が1/3程度残っている。41~45は刀身部である。

耳環（第12図、図版9）



第12図 出土遺物実測図

(4) (2:3)

2点出土している。いずれも中実のものである。46は2.2cm×2.4cmの円形で、断面は0.4cm×0.8cmの楕円形である。重さは10.0gである。47は2.2cm×2.3cmの円形で、断面は0.5cm×0.8cmの楕円形である。重さは8.4gである。いずれも断面形が扁平な点が特徴的である。

中世の土壤（SK1）（第13図、図版7）

墳丘背後の周溝堆積土中から掘り込まれた土壤である。検出した際の平面形は円形で、71cm×76cm、深さ50cmの規模である。底面は周溝底面にまで及んでいる。

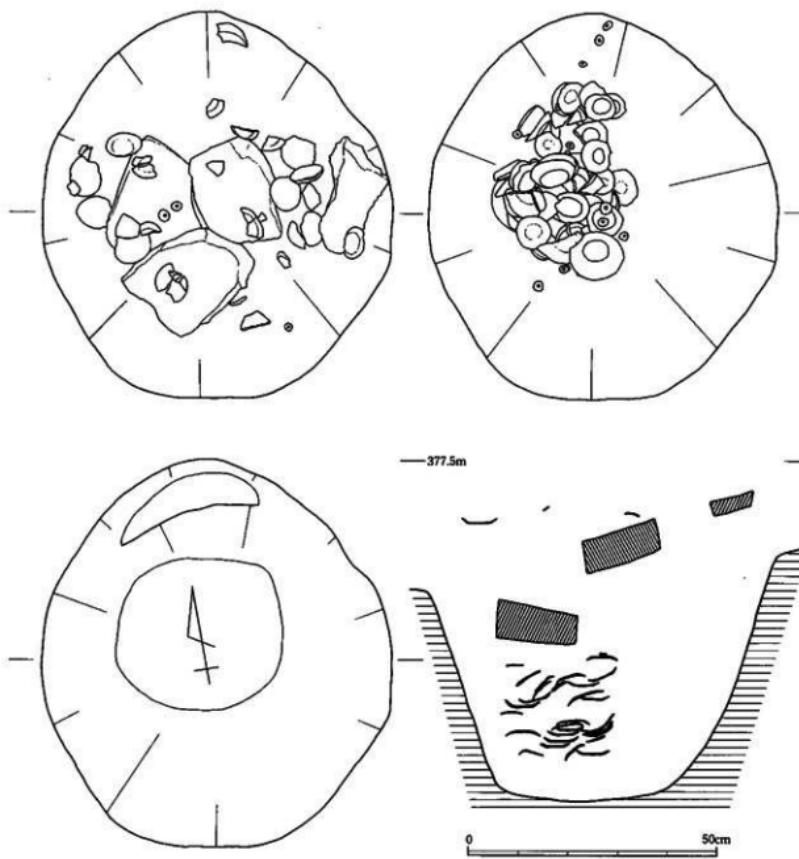
土壤内からは多数の土師質土器皿（ほとんどが完形品）と古銭が出土した。土壤の上面には小角礫4個があり、この小角礫の上下で遺物の出土状況が異なっている。角礫の上面では土師質土器や古銭の出土はまばらでまとまりがない。ところが礫の下面では土師質土器皿は北西側（30cm×40cm）の範囲でまとまって出土しており、10数枚を重ね合わせたものを数組接するように配置している。重ね合わせは大半が口縁部と底部を合わせているが、中には口縁部どうしを重ね合わせたものもみられる。そして、これら積み重ねられた土師質土器の間に1枚から数枚の古銭が挟まれている例がみられた。これらの状況から何らかの容器に入れていた可能性が高い。

出土遺物（第14図、図版10）

土師質土器皿と古銭が出土している。古銭については鋳化が進み遺存状況が極めて悪く、図化できなかったが、判読できたものには開元通宝、至道元宝、皇宋通宝、元豈通宝、元祐通宝、聖宋元宝、洪武通宝がある。土師質土器皿は出土点数約140点である。法量や形態から以下の3タイプに区分した。個体数ではタイプ2>タイプ3>タイプ1となり、タイプ2が最も多い。いずれも底部は回転糸切りである。

タイプ1（48~51）は口径11.3~11.9cm、器高2.8cm、底径5.6~6.0cmで、各法量がタイプ2・3に比べ大きい。体部が外側に開き、口縁端部はやや尖り気味におさめている。色調は黄褐色ないしは淡黄褐色で、微砂粒を若干含んでおり、遺存状況はタイプ3にくらべるとやや良好である。

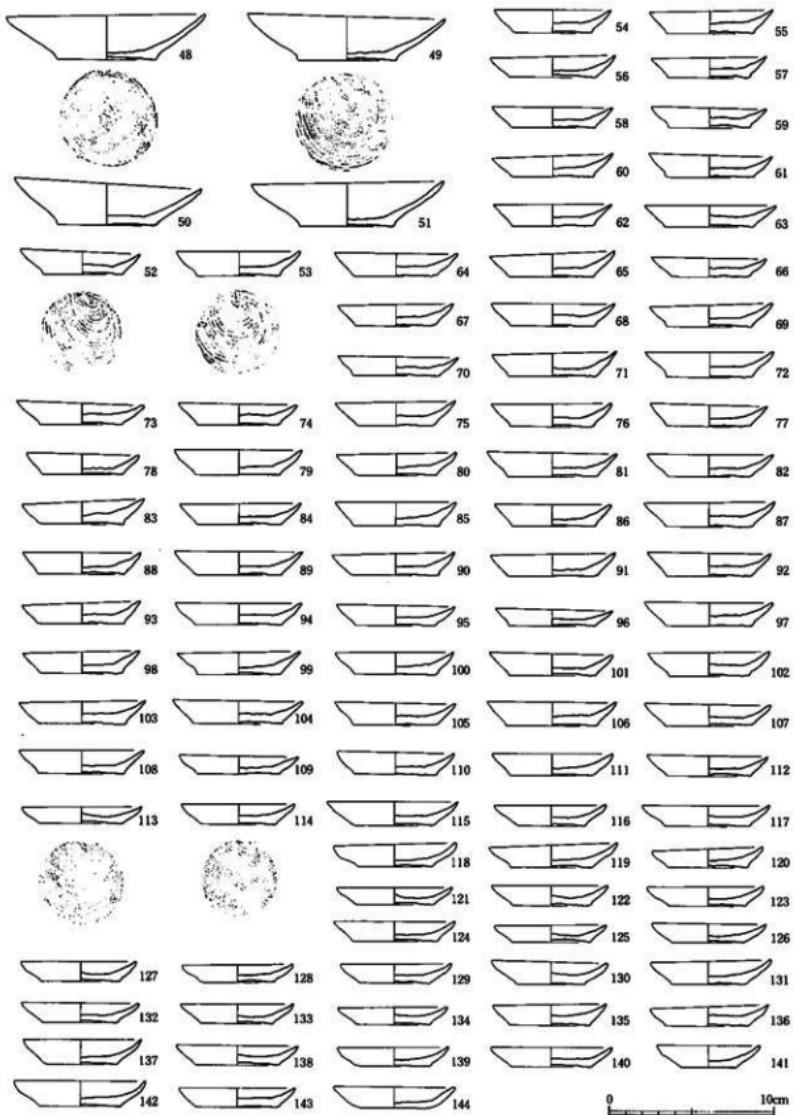
タイプ2（52~112）は口径6.1~8.0cm、器高1.0~1.6cm、底径4.8~5.4cmの小型の皿で、体部が外側に開き、口縁端部はやや尖り気味におさめているものが多い。法量や形態はタイプ3に類似するが、3に比べるとやや大型のようである。色調は黄褐色ないしは淡黄褐色で、微砂粒を若



第13図 SK 1 実測図 (1 : 10)

干含んでおり、遺存状況はタイプ3にくらべるとやや良好である。

タイプ3 (113~144) は口径6.1~7.8cm, 器高1.0~1.5cm, 底径3.4~5.1cmの小型の皿である。体部が外側に開くもので、口縁端部はやや尖り気味におさめているものが多い。色調は黒褐色ないしは黒灰色と黒みが強く、1~2mm大の砂粒を含んでおり、遺存状況はあまり良好でない。



第14図 出土遺物実測図(5)(1:3)

V まとめ

亀ノ尾第1号古墳の構造や遺物については前述したとおりである。ここでは、これらの事柄について若干の整理を試み、本古墳の位置付けをしようと思う。

立地と群構成

亀ノ尾古墳群は3基で構成される古墳群である。さらに細かく見ると西側の谷を挟んで第1号古墳と第2号・第3号古墳に細分できる。基本的には第1号古墳と第2号・第3号古墳は異なる丘陵から派生した尾根上に位置している。さらに第2号古墳と第3号古墳は間に小さな谷を挟んでいる。このような占地の様子は本古墳と同じ丘陵の東側に存在する福田寺古墳群（5基）が丘陵頂部の稜線沿いに10数mの間隔で連続と造られている様子と比較すると対照的で、群構成はいささか稀薄であると言わざるを得ない。

したがって、本古墳は占地の状況からは独立墳に近いと解することができる。ただし、第2号・第3号古墳と同一の生産基盤であると思われる可耕地を望むことができるので比較的緩やかな繋がりは持っていたようである。

内部主体

内部主体は無袖の横穴式石室である。天井石は奥壁部分の2枚のみで大半が欠失していたが、側壁・奥壁は比較的良好に遺存していた。しかし、石室内は後世の盗掘等により大きく荒らされており、遺存状況は良好ではなかった。

石室の平面形は東側壁の中央部が外側に若干脹らみ、西側壁がほぼ直線となっている。全体的には中央部がやや広がる形態をとる。掘方との関係からも西側に中軸線がずれて構築されていることや東側壁が床面から天井部にかけて若干内傾するのに対して、西側壁はほぼ垂直となっている。さらに石室は南に開口するにも関わらず斜面は東から西に向けて傾斜しており、石室構築時に西壁から構築したことで省力化が見込まれる。以上のことから、本古墳では西側壁をひとつ基準として石室を構築したと推定できる。

次に、石室の構築にあたっては、側壁の基底に大型の石を使い、それらを縦長もしくは横長に使用することで玄室、羨道、閉塞部といった石室内の区画を行っている。これらの区分が判然としない石室が多くみられることを考えると本古墳の石室の特徴のひとつといえよう。

このほかに、石室開口部で石室の長軸方向にはほぼ直交して石列が存在する。この石列は石室先端部の石材から延びるものではなく、一つ奥壁側の基底石の先端あたりからに延びている。各石材の高さがほぼ一定していることから本古墳に付属するものと考えられる。西側が一部削平を受けているので本来の規模は不明だが、盛土流出防止を目的とした石列と考えることもできる。

使用年代

石室の床面がかなり攪乱されており、石室内からの出土遺物は少なく、特に本古墳の築造使用時期を推定できる杯頬（須恵器）の出土は少なかった。これに対して石室の前面からは比較的良好に遺物が出土しているが、量的にはそれほど多くない。これら石室の前面から出土した遺物は

追葬にともない石室内から搔き出された遺物と墓前祭に伴う遺物が混在しており、両者を区分することは容易ではない。しかし、本古墳の大まかな使用期間は出土した須恵器の年代観から推定することが可能である。すなわち、①杯類では回転台からの切り離し後未調整部分が多く省力化の傾向が見えること、②高杯等については小型化の傾向が窺えること、③宝珠をもつ小型壺蓋の出現などから、おおむね6世紀末から7世紀中頃にかけての時期幅の中におさまるものと思われ、数回程度の追葬を想定できる。

中世の土壙

土師質土器皿の出土状況から判断すれば壙内に直に置いて積み上げたとは考えにくく、容器(30cm×40cm、高さ30cm程度の大きさ)に収納して埋置したものと考えても良さそうである。そしてその埋納行為も1・2回程度とごく限られたもので、そのためにSK1は掘られたと思われる。

のことから本土壙の性格については土師質土器そのものをまとめて埋納した何らかの祭祀跡であった可能性が強い。祭祀の対象や目的については明確ではないが、この場所が塚もしくは墓として意識されていた可能性は否定できない。

時期については土師質土器皿と古銭から推定する以外ないが、古銭の内、判読できた最新のものが洪武通宝であることから少なくとも14世紀の後半以降の年代が与えられる。土師質土器については町内では康徳寺古墳の調査の際にいくらか出土しているが、周辺で良好な中世の遺跡に恵まれていない事もあり十分な変遷が判明しているとは言い難い。そこで、地域性が存在する事を考慮しつつ、芦田川下流にある草戸千軒町遺跡の土師質土器皿の変遷に当てはめると、法量や器高指數などから概ね草戸のⅢ期に当たるのではないかと思われる。しかしながら周辺の土師質土器の動向について不明の点が多く、現状では特定できない。

結語

本古墳周辺の古墳群は東流する芦田川を挟んで南北の丘陵上に分布しているが、その分布の状況は特徴的で、本古墳の所属する北側のグループは丘陵の南に緩く傾斜する尾根斜面に数基単位で点在する場合が多い。これに対して、南側のグループは芦田川に近い丘陵北側の尾根頂部付近に分布し、古墳の密度も高い。両グループの生産基盤はほぼ同一と考えられることから、その差異をもたらす要因については次のようにいくつか想定することができる。①造墓集團人口の多寡、②開発に伴う領域(主として可耕地)の拡大による母村からの分村化、などを考えることができる。ただし、古墳時代の集落跡や古墳群の調査が余り進んでいない状況にあっては具体相を検討することはできず、今後の調査例の増加を待ちたい。

註

- (1) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』IV 1995年



a 遠景（南から）



b 全景（調査前、南から）



c 同上（調査前、東から）



a 全景（調査後、南から）



b 同上（調査後、東から）



c 東側周溝土層（南から）



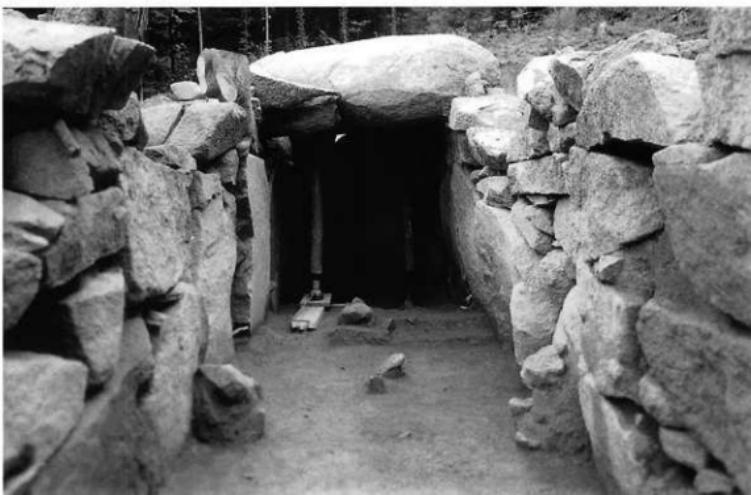
d 北側周溝土層（東から）



a 墳丘盛土（南から）



b 石室全景（南から）



c 石室（南から）



a 石室奥壁（南から）



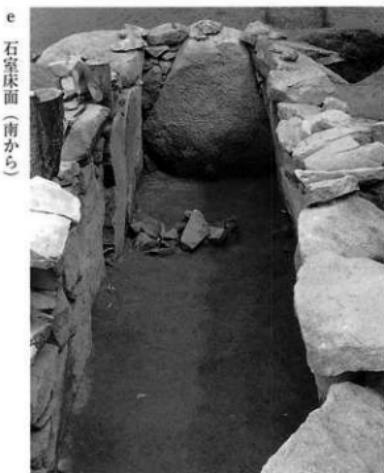
b 同左（南から）



c 石室北西隅（南から）



d 石室北東隅（南から）



e 石室床面（南から）



f 同左（北から）



a 天井石（東から）



b 石室掘方土層（北側，東から）



c 石室掘方土層（西側，南から）



d 石室掘方土層（東側，南から）



e 調査風景



f 調査風景



a 石室全景（南から）

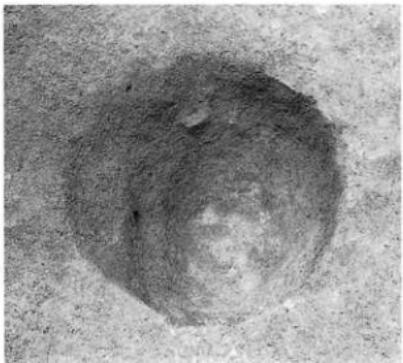


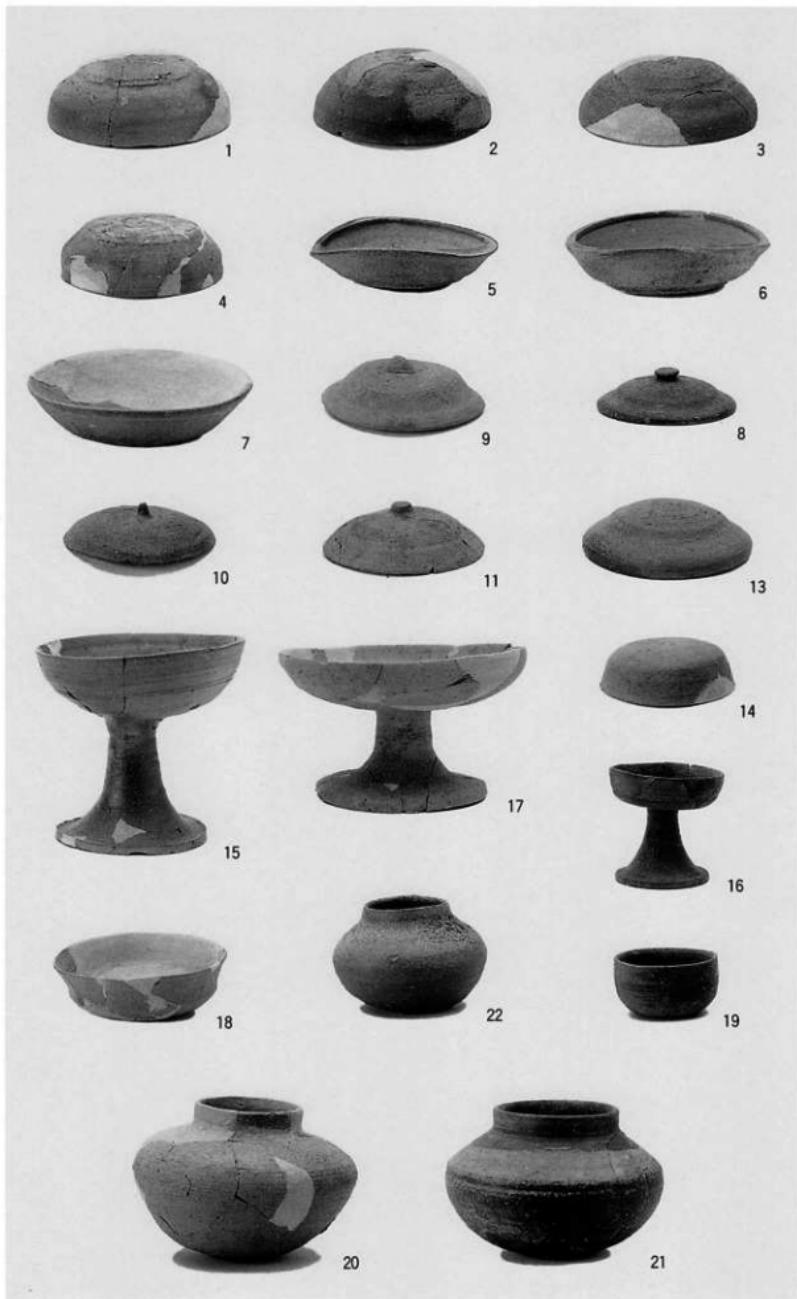
b 石室基底石（南から）



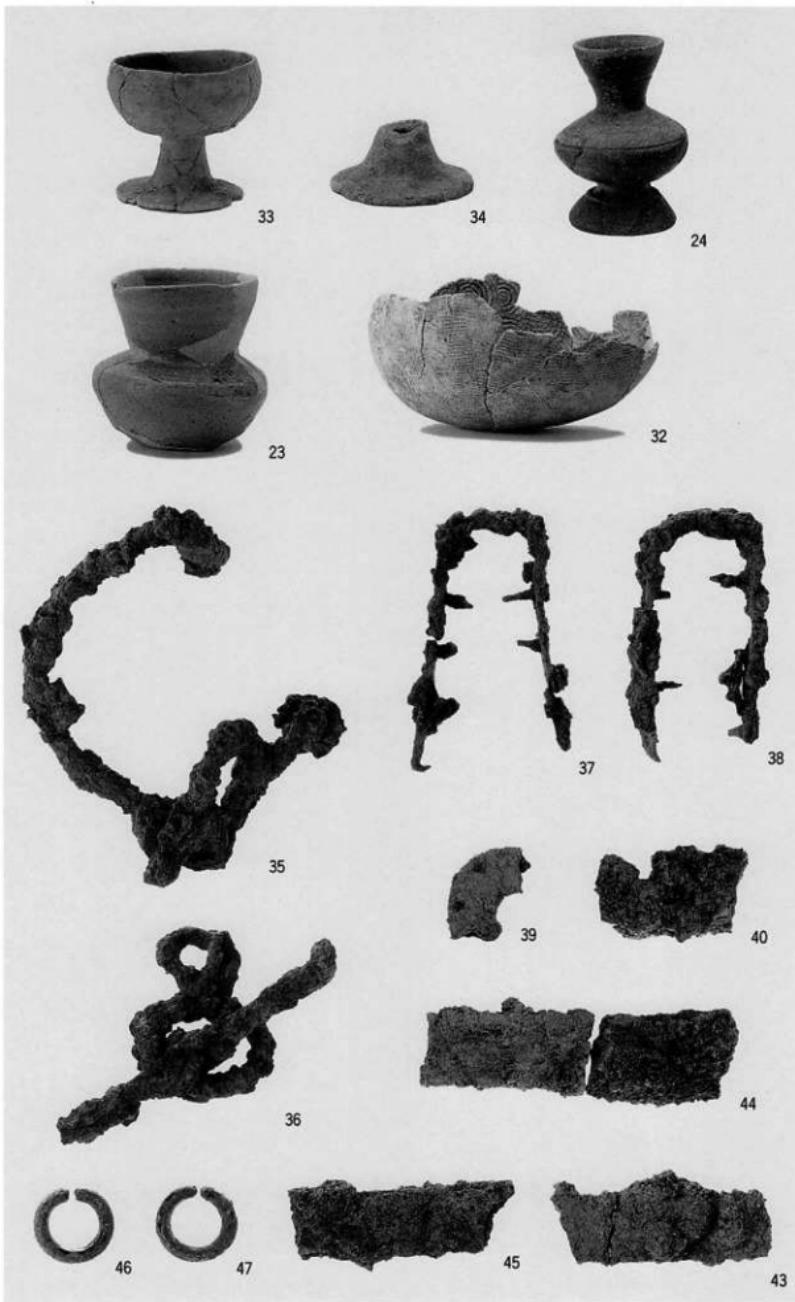
c 石室掘方（南から）

SK1遺物出土状況及び全景

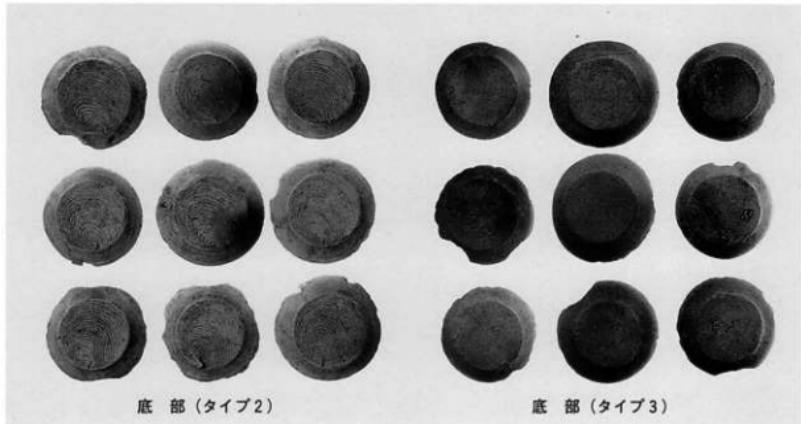
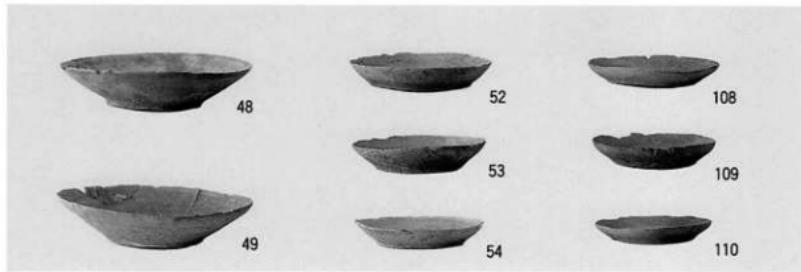




出土遺物（1）



出土遺物（2）



出土遺物 (3)

報告書抄録

ふりがな	かめのおだいいちごうこふんはくつちょうさほうこくしょ							
書名	亀ノ尾第1号古墳発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第189集							
編著者名	辻 満久							
編集機関	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8-49							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° °'	° °'			
亀ノ尾第1号 古墳	広島県 世羅郡 世羅町 賀茂	34462	395	34度 34分 38秒	132度 59分 01秒	19990705 19990922	625m ²	広島中央区域 農用地総合整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
亀ノ尾第1号 古墳	古墳	古墳 中世	横穴式石室 土壙		須恵器 土師器 鉄器 土師質土器 古錢			

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第189集

亀ノ尾第1号古墳発掘調査報告書

発行日 2000(平成12)年3月31日

編集・発行 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

T E L (082)295-5751

<http://hmaibun.d-net.co.jp>

印刷所 西日本印刷株式会社